

Faculty Development

山梨大学教育人間科学部

第27号

Aug.1.2009

INVITATION



5月20日13時より「平成21年度 教育人間科学部教員 初任者研修会」が開催されました。前田学長、寺崎教育人間科学部長の挨拶の後、人事課長より法人職員の服務と倫理、研究推進室長より外部資金・科学研究費、総務・広報課長補佐より環境改善活動などについての説明がなされました。出席された先生方は5名です。写真左側からの順で、参加されたコメントを掲載いたします。

学校教育講座 平井 貴美代

まずは、FDをご担当くださった先生方、事務官の方々にお礼を申し上げたいと思います。前任の大学では初任者研修は全学で一括して行われましたが、学部単位で行っていただくと質問もしやすく、雰囲気もずいぶんと和やかな感じを受けました。また、このような場でもないと、間近で学長先生、学部長先生のお話を聞く機会もなかなか得られないものです。よい機会をいただいたと感謝しております。

同じ国立大学法人とはいえども事務の手続きなど細かい点となるとさまざま、サービス関係でもかなりの違いがあることが、半年経ってだんだんとわかってきたというのが実情です。今回のような研修で大卒についてご説明を伺う限りではそれほどの違いは感じませんが、いざ仕事に取り掛かってみると戸惑うことが多々あります。武藤先生、加藤先生がアドバイスくださったように、こまめにまわりの先生方にご相談しながら、一步一步着実に仕事を覚えていきたいです。

障害児教育講座 渡邊 雅俊

早いもので、赴任してから半年が経過しました。私立大学に6年間在籍してから移ってきたので、これまでの経験を生かせることも少なくないのですが、やはり環境に慣れるだけで精一杯といった感じの半年間でした。現在、充実した教員生活を送らせてもらっているのは、同僚の先生方や学生に恵まれたからだと思います。そのような中、教育や事務仕事を通し、様々な問題意識も生じてきており、今回、良いタイミングでまとまった研修時間をいただけたことは幸いでした。大学各部門担当者のご説明が分かりやすかったので、短時間で国立大学法人の内実が垣間見えたような気がします。また、FDの重要性を再確認でき、教育・研究に今後ますます精進しなければという思いを新たにしました。最後になりますが、研修会を企画していただきましたFD委員会の皆様に、深く感謝申し上げます。

技術教育講座 小川 覚美

このたびの初任者研修会は、大学教職員としての服務規程、大学が取り組んでいる環境活動等について説明を受け、改めて、あるいは、新たにそれらを認識する貴重な機会となりました。このような機会を作っていただきました皆様に心から感謝申し上げます。FDに関しましても、これまでに、FDに関する講演会等の研修会に参加したことはあるものの、FDの定義、何のためにFDが必要なのかといった根本的な部分について漠然とした解釈しかなく、今回の説明は貴重なものとなりました。また、科研費等の外部資金の重要性を再認識し、外部資金の取得にも積極的に取り組む必要があると強く感じております。

学校教育講座 東海林 麗香

初めて大学での専任になることもあり、このような研修の機会を設けていただいたことは、大変ありがたいことでした。研修会を企画していただいたみなさま、ご説明をいただいたみなさまにお礼申し上げます。

服務規程や給与の仕組みといった、専任として勤務する際に必要になる情報を多角的に得ることができ、とても参考になりました。加えて、FDや科研費についての説明をいただき、これまでは個人の指針・業績としてのみ捉えていたものを、大学という組織の中で位置づけて見直すことができました。質疑応答の際には、会に出席された他の先生のお話をお聞きすることもでき、あいまいに理解していた点に気づかせていただきました。

今後、山梨大学の一員として、研究・教育・地域貢献といった活動に取り組んでまいりたいと思います。みなさまのご指導をよろしくお願いいたします。

数学教育講座 清野 辰彦

「我々は、1つのチームです」。学部長が初任者研修会のはじめのあいさつの際に話された言葉です。この言葉は、2時間あまりのこの研修会の至るところで、私の頭の中に現れ、そして心を揺さぶってきました。「チームの一員として、私に何ができるのか」と。

まず、「法人職員の服務と倫理」に関するお話を拝聴いたしました。チームの一員として、あるべき姿を示していただきました。次の「外部資金」に関するお話では、一人ひとりが外部資金を獲得し、研究を深化・発展させていくことが、大学にとって重要な意味をもつということを教示していただきました。また、「FDの現状と課題」では、一人ひとりが、教育・研究等に関する専門的能力を日常において高め続ける態度を養うことの必要性と重要性を教示していただきました。

大学、社会、学生の質の向上を強く望み、そのために自分にできることから、一つ一つ取り組み、そして自己実現をしていく。それが、チームのために今の私ができることだと思います。初任者研修会を企画、運営して下さった皆様に感謝申し上げます。



※ たいへん有意義な会を持つことができました。ご出席くださった皆様方に心より御礼申し上げます。

学部FD委員会

第1回FD授業公開：「肢体不自由児教育課程論」7月3日（金）2時限 LC-21

【授業者の思い】 考えることを考えられる障害児教育担当の教師を育てたい

古屋 義博（障害児教育講座）

肢体不自由特別支援学校に在籍する子どもたちの多くが知的障害を重複しています。そのような子どもに出会い、多くの教師は（山梨県立甲府養護学校やあけぼの養護学校に勤務していた当時の私も）、自分は何ができるのかと悩みます。マニュアルや例示がないか、使いやすい教材はないか、と「形」を求めます。しかし、「形」から子どもにかかわると子どもは何も応えてくれません。といて、教師が感じるがままに子どもに向き合うと、教師自身の偏向した価値観によって、授業はしなやかさを失っていきます。そうならないように「形」によって、自身の価値観を修正しなければなりません。そのようなジレンマを受容しながら、子どもに向き合い、悩み、考え、学び直して、また悩み、考え、学び直すことのできる教師になってほしいというのが学生への私の願いです。

そこで、「形」として「障害の概念（国際基準）」や「学習指導要領」などをがっちり理解させ、そして、あの授業で示したように、そこから羽ばたく訓練もさせます。

この授業は、特別支援学校教諭免許状を取得するための必修科目で、主に障害児教育コース1年生が履修します。授業公開では16人もの方々にご参加いただきました。授業後の約30分間の授業研究会やアンケートでは、「授業の目的や目標設定」、「情報量」、「技術論」など、さまざまなご意見・ご助言をいただきました。

「技術論」について、具体的にご助言を多数いただきました。さっそく次の授業からそれらを活かすこ

とにします。「情報量」については「（1年生相手に）多すぎる」と「適当」との二分したご意見をいただきました。これについては精選が必要であろうと判断しましたので、講義ノートの点検を行おうかと考えます。「授業の目的や目標設定」についても、「（1年生には）高すぎる」と「適当」との二分したご意見をいただきました。ただ、あの授業に初めて参加したにもかかわらず「適当」と判断された方が複数でしたので、学生の意欲や能力をこれまで以上に信じて、目的・目標をより高めに設定し直そうと決意しました。ご参加いただきましたみなさま、



そして、とてもいねいな運営をしていただいた学部FD委員のみなさまに感謝を申し上げます。

【授業参加者の感想】 教員・学生アンケートの結果（参考になった点等、一部を抜粋）

- ◎黒板に本日の授業のアウトラインが示され、進展に応じて実線で消去し、いま学んでいることを常に明確化していた点。
- ◎前の授業の復習が丁寧になされていた。これにより自宅での予習・復習が促されていると思われる。
- ◎復習問題を課題として事前に学生に与えていた点。またその中であらかじめ発表する学生を指名しておいた点に工夫がみられたと思います。
- ◎オーソドックスな授業（講義）でありながら、事前の計画、構成がしっかりおこなわれており、受講生を引き付けるメリハリのある進行。学種指導要領を用いながらも、それをなぞるだけに終わらない内容。
- ◎授業の流れの中で、問題意識（現在の指導要領の目的区分の細かさ）を喚起するタイミングが絶妙。
- ◎学生を積極的に参加させようとするための発問や、そのための予・復習を促す姿勢がとても勉強になった。
- ◎授業時間内に、学生に考えさせる時を設けている。
- ◎きっちり授業をやっている。学生の学習状況や理解の程度などをきっちり把握している。



白玉は 人に知らえず

長谷川 千秋

来年は平城遷都 1300 年とあって、奈良は様々なイベントに沸くと聞く。その奈良町に静かに佇む元興寺という寺がある。今ではあまり知られていない寺だが、都を明日香から奈良に遷すにあたって、明日香にあった法興寺（現・飛鳥寺）を移したという由緒がある。『萬葉集』には、元興寺の僧が天平十年（738）に自らを嘆いて詠んだ歌が収められている。

十年戊寅に元興寺の僧が自ら嘆く歌一首

白玉は 人に知らえず 知らずともよし 知らずとも 我れし知れば 知らずともよし（白玉は 人に知られぬ 知らなくてもよい 知らなくても 私さえ知っていたら 知らなくてもよい）

右の一首は、或いは、「元興寺の僧、独覚にして多智なり。いまだ顕聞あらねば、衆諸狎侮る。これによりて、僧この歌を作り、自らの身の才を嘆く」といふ。

（右の歌は、ある伝本には、「元興寺の僧は、ひとり修行を積み自らの道を深く悟っていた。世間に知られなかったので人々は軽んじ侮った。そこで僧はこの歌を作って、我が身の才の空しさを嘆いた」とある）（巻六・一〇一八）

歌の「白玉」とは真珠のこと。「独覚にして多智」である自らを、貝の中の真珠に譬え、己の真価が世間に知られないことを嘆く歌である。歌の形式は五七七・五七七から成る「旋頭歌」で、旋頭歌には上の句と下の句で同じことばを繰り返す特徴がある。特にこの歌では各句に「シラ」「シレ」という音が配され、和歌には珍しく頭韻を踏む技法がとられている。この単純なことばと音の反復により、僧の嘆きは増幅される。しかし、仮にも深く仏の教えを悟った人物ならば、このような世俗の嘆きとは無縁のはずである。本当は「一癖ある俗っぽい僧」（釈注）という解釈もあるが、嘆きはポーズで真意ではないという見方もできるだろう。というのも、ここで旋頭歌という特異な形式が選択されているからである。旋頭歌は、和歌の古い形式で、言語遊戯性が高く、集団歌謡としての性質をもつものである。したがって、戯れにみなで声を出して謳うことを意図して作られた歌であったと考えられる。己の不運を嘆くのは今も昔も変わらず一般的なことであろうから。

今、演習発表やレポートをみていると、特に頑張らない、追究しない、まあそこそこ出来たところで…と、器用に折り合いをつける学生が増えているように感じる。あたかも白玉を内に秘め、別の意味で「知らずともよし」と悠々としているかのようである。真価は外に現れてこそ真価であり、内にしまっている、それが玉とも石とも区別がつかない。

学ぶことにここまでというような限度はなく、そのような姿勢を私自身もちつづけることと、学び知る楽しみを学生に伝えていくことが、私の課題である。